

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13866

研究課題名（和文）児童の「援助要請」を促進するための実践方略の開発

研究課題名（英文）Development of Practical Strategies to Facilitate Children's Help-Seeking Preference

研究代表者

小沼 豊（KONUMA, Yutaka）

北海道教育大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：50764289

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、児童の援助要請を促進するための実践方略を開発することを目的とした。実践方略の開発にあたっては、実際に「援助を求める/求められる」というロールプレイを通じた体験的な活動に着目し、「いじめの避難訓練」として体系化を行った。ロールプレイは、「友達に相談する/相談されたら」「電話相談ダイヤルに相談してみる」という2つの台本（シナリオ）を用いて実施した。実践結果から、援助の欲求や態度や援助要請の利益・コスト意識などの変化から、「いじめの避難訓練」の効果を科学的に実証できた。自分で解決策を見つけない場合の対処方法を学び、信頼できる人に相談することの重要性を認識できたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、いじめに関する科学的なアプローチと援助要請に焦点を当て、児童が援助を求めやすくするための実践方略の開発を目的とした。実際に「援助を求める/求められる」というロールプレイを行い、「いじめの避難訓練」として体系化した。研究は5つの手続きによって実施された。その結果、児童が援助要請を行いやすくなることが確認され、「いじめの避難訓練」の効果を科学的に実証できた。困難な状況において、誰に助けを求めることができるか、自分は何ができるのかを学ぶことができた。これは「自己指導能力」の獲得にも関連するものと言え、学校教育における授業実践として社会的意義をなすものである。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop practical strategies to promote children's help-seeking behavior. In developing these strategies, the study focused on experiential activities through role-playing of actually seeking and being asked for help, and developed it as a "bullying evacuation drill." The role-play was conducted using two scenarios, "consulting with a friend/being consulted" and "trying to consult a telephone counseling dial." Based on the practical results, the effectiveness of the "bullying evacuation drill" was scientifically demonstrated by changes in help-seeking desires, attitudes, and the benefits/cost awareness of help-seeking. It is believed that participants learned the importance of seeking help from trusted individuals when they cannot find solutions on their own.

研究分野：生徒指導、学校心理学、教育心理学

キーワード：いじめの避難訓練 援助要請 被援助志向性 小学生 ロールプレイ 実践方略 生徒指導 学校心理学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

教育現場では、子どもの抱える問題や課題が多様化・複雑化しており、いじめへの効果的な対処に苦戦している。近年では、インターネット上(SNS)でのいじめも珍しくなくなってきている。2013(平成25)年に「いじめ防止対策推進法」も施行され、いじめに対する対処が注目される場所であるが、未だいじめによる自殺などが絶えない状況である。そのような中で、いじめなどで困った際にどうすれば、その状況から脱することができるのかということ、体系的に教育していく必要があるのではないかと考えた。発達段階に伴う自尊心などの影響から、いじめは見えにくくなり(発見しづらくなる)、子ども自身が自ら身を守る術を身につけるような取り組みが重要になる。

自身が困ったときや悩みに直面した際に、他者に援助を求めたり、相談に乗るといったことに関しては、「援助要請」「被援助志向性」などとして研究がなされてきている。「被援助志向性」とは「何らかの困難に直面した者が、他者に対して積極的に援助を求めようとするかどうかの認知的枠組み」である(水野・石隈、1999)。困ったときに他者に助けを求めること(行動)と、求めたいと認識すること(志向性)を捉えながら、いじめに対する具体的な対処方略について、検討していくことが必要であると言えた。

これまでのいじめの研究に関しては、いじめの構造や現象(森田・清永、1994)の解明や被いじめ体験による影響(坂西、1995)などで学術的研究の蓄積はなされている。また、援助要請に関わる研究については、水野・石隈(1999)の示した4領域において蓄積されている一方で、授業実践を用いた具体的なプログラム開発はなされていない。そこで、先行研究(高橋・小沼、2018)をもとに、いじめ研究ではみられなかった科学的実践と援助要請研究で示されてきた要因を融合させた実践方略について検討することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、いじめ研究における科学的実践と援助要請研究を捉えた上で、児童の援助要請を促進するための実践方略を開発することを目的とした。実践方略の開発にあつては、学校行事や授業日数等の確保を考慮し、1コマ(1回)の実施で効果が得られることが望ましいと言える。そして、ロールプレイによる体験的な活動に着目し、実際に『「相談する側」と「相談される側」』とに分かれて、体験的に学んでいけることが大切と考えた。また、役割を演じる体験活動の意義は、文部科学省の「体験活動の教育的意義」によっても示されており、実践方略の開発は教育現場においても期待されているものである。

3. 研究の方法

本研究の目的である児童の「援助要請」を促進するための実践方略を授業の中での役割体験(ロールプレイ:「いじめの避難訓練」)から明らかにしていくために、以下の方法で検討した。

(1) 指導案及びロールプレイの台本(シナリオ)の作成

先行研究のレビューから抽出された要因を捉えた上で、発達段階(小学校4年、5年生)の特徴から効果的な役割体験の展開・効果検証のあり方について検討した。そして、授業実践における指導案及びロールプレイの台本(シナリオ)を作成した。ロールプレイの台本(シナリオ)については、「友達に相談する/相談されたら」「電話相談ダイヤルに相談してみる」という2種類を作成した。「友達に相談する/相談されたら」では、無視されてどうしたらいいのか分からない場面とその対応のロールプレイによって、一緒に考えていく大切さを体験するものである。「電話相談ダイヤルに相談してみる」では、匿名でも悩みの相談ができるということを体験し理解する内容である。

(2) 授業実践と効果検証に関する手続き

授業実践とその効果検証について、附属小学校の4年、5年生を対象に検討した。効果検証にかかる測定には、アンケート調査と実践場面の観察の2つによって実施した。そしてアンケート調査に関しては、2つのクラスの準備(実験群と統制群)、授業前(Pretest)となる質問紙調査の実施、実験群での授業実践(いじめの避難訓練)の実施、授業後(Posttest)となる質問紙調査の実施、3週間後(Follow-up)となる質問紙調査の実施という5つの手続きによって行われた。

(3) 授業実践の展開

授業実践の展開については、次の6つから行われた。「イントロダクション:辛い嫌な想いをしたときどうするか」では、授業の導入で架空の登場人物2名をもとに、辛い嫌な(いじめられる)場面を提示しながら、「『自分だけでは、なかなか解決策が見つからない』とき、どのようにすればいいのだろうか」という学習課題を立て、課題に対して考えていく意識づけを行った。「辛い嫌な想いをすることによる影響について考える」では、辛い嫌な想いをすることによ

て、どんなことが起こるのかについて考えた。「実際にロールプレイを行い、助けを求める／求められることの大切さを理解する」では、信頼できる人(親友)に対しての相談の仕方や相談された場合の応答の仕方、そして、他機関への相談についても想定した台本(シナリオ)をもとにしたロールプレイを行った。ロールプレイでは、それぞれ役割(「相談する側／される側」「電話する側／受ける側」)を交代しながら実施した。「何組かのロールプレイを学級全体に示す」では、何組かの児童のロールプレイを学級全体に示した。自身の行ったロールプレイを客観的にみることによって、援助の求め方や受け止め方の重要性について理解を深めた。「相談することの大切さを理解する(振り返り)及びまとめ」では、実際にロールプレイをやってみて感じたことの振り返りから、相談することの大切さの理解を深めた。そして、辛く悩んだときは1人で抱え込まないで誰かに相談してほしいということ、いじめは許されないというメッセージを伝えていくという展開である。

(4) 授業実践の比較検討

授業実践の信頼性を高めるために、附属小学校での調査結果を踏まえた上で、公立小学校(4年生、5年生)を対象にした比較検討を行った。公立小学校における実施に際しては、授業導入時の際の発問や言い回しなどといったことを検討した。また、授業実践の精緻化と、発達段階における系統的な取り組みのために、公立小学校での調査結果を踏まえて、公立中学校を対象にした比較検討を実施した。実施にあたっては、ロールプレイの台本「友達に相談する／相談されたら」(シナリオ)について、SNS上のトラブルから仲間はずれになったという内容を構成し検討した。

4. 研究成果

(1) 援助要請を促進させる効果的な授業実践

授業実践の前後(PretestとPosttest)と3週間後(Follow-up)のデータによる効果を検討した。その結果、被援助志向性と援助要請行動に関する内容について、統制群においては、どの下位尺度得点からも有意差は認められなかった。一方で、実験群では全ての下位尺度得点から有意差が認められ、援助に対して肯定的な変化をしていることが明らかになった。そして4年生においては、5年生では認められなかった「援助関係に対する抵抗感の低さ」で有意差(PosttestとFollow-up間において)が認められた。この結果から、自身のいじめ被害を知られたくないという心理を授業実践によって、変容させた可能性が示唆された。また、テキストマイニングによる分析結果から、「ゆっくり話を聞くことが大切」「授業を受けて(いじめの)対処の仕方が分かった」「いじめ(悩み)は抱え込まず相談する」などというような語句がまとめ、いじめに対する援助要請の態度や対処方略についての理解を促進させる効果が示唆された。そして、授業実践の精緻化と系統的な取り組みに際して、公立中学校を対象に比較検討を実施した。その結果、公立小学校と同様の傾向を明らかにし、学会にて発表した。

(2) 実際に声に出して体験することの重要性と意識づけ

実際に声に出して、「誰かに相談する／相談される」という体験をすることによって、自分事として引きつけて考えることができる。相談してみるというロールプレイを通して、相談に際してのイメージを抱くことができ、援助要請を促進する要因になることが示唆された。「誰にだったら相談できるか」「誰からの相談だったら、一生懸命になれるか」などと、学習課題への意識づけを高めていくことが重要になる。

以上のようなことが、研究成果として得られており、今後は、ロールプレイにおけるペアリングや教員個人そして学校の地域性による影響、対象学年の拡大といった観点から更に授業実践を精緻化していくが必要になる。

<文献>

城西友秀(1995)「いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差」『社会心理学研究』,11,105-115.

水野治久・石隈利紀(1999)「被援助志向性・被援助行動に関する研究の動向」『教育心理学研究』,47,530-539.

森田洋司・清永賢二(1994)『新訂版 いじめ-教室の病』金子書房

高橋知己・小沼豊(2018)『いじめから子どもを守る学校づくり-いますぐできる教師の具体策』図書文化

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小沼豊	4. 巻 5
2. 論文標題 小学生の援助要請を促進させる授業実践に関する一考察 - 4年生に対する授業実践「いじめの避難訓練」を通して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 19 - 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小沼豊	4. 巻 29
2. 論文標題 小学生の援助要請を促進させる授業実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本特別活動学会紀要	6. 最初と最後の頁 71 ~ 80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51044/tokkatsu.29.0_71	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小沼豊
2. 発表標題 公立小学校4年生に対する援助要請を促進させる授業実践（「いじめの避難訓練」）に関する研究 - 附属小学校4年生の実践結果との比較検討を通して -
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小沼豊
2. 発表標題 援助要請を促進させる授業実践（いじめの避難訓練）の研究 - 公立小学校と中学校との系統的なプログラム開発を目指して -
3. 学会等名 日本生徒指導学会第23回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小沼豊
2. 発表標題 公立小学校5年に対する援助要請を促進させる授業実践に関する研究 - 授業実践（「いじめの避難訓練」）を通して -
3. 学会等名 第54回日本カウンセリング学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小沼豊
2. 発表標題 「いじめの避難訓練」の授業実践による被援助志向性への影響 - 附属小学校4年生への実践に着目して
3. 学会等名 日本特別活動学会第30回東京大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小沼豊
2. 発表標題 小学生の援助要請を促進させる授業実践 - A公立小学校の4年生に対する授業実践「いじめの避難訓練」を通して -
3. 学会等名 日本学校心理士会2021年度大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小沼豊
2. 発表標題 小学生の援助要請を促進させる授業実践 - A公立小学校の5年生に対する授業実践「いじめの避難訓練」を通して -
3. 学会等名 第1回日本公認心理師学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小沼豊
2. 発表標題 「いじめの避難訓練」の授業実践による被援助志向性への影響 - 小学校5年生への実践に着目して -
3. 学会等名 日本特別活動学会第29回岡山大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関